

かなしい幸せ Happiness on Sadness

藤田雅史

マリッジブルーだよ、とひとは言う。

次の日曜日、私は結婚式を挙げる。半年もかけた準備はほぼ万端で、天気も週末まるごと晴予報。あと私がやらなければならぬことといえば、体調を整えることと、風呂上がり肌の手入れを欠かさないことくらいだ。

幸せなのは間違いない。夫となる直哉は誠実な男だし、家族も親戚も、それは直哉の親族も含めて、みんな私たちの結婚を祝福してくれている。なのに、私はその日が近づくほど、何かに足を引っ張られているような、こそこそ身を隠さないといけないような、うしろめたい気持になる。

直哉のプロポーズを受けてから、私は式の準備に心血を注いできた。結婚式は面倒くさい、超大変、と多くの経験者は言うけれど、でもその面倒くささと大変さを、私たちは愛そうと決めた。楽しもうと誓った。

実際にそれは楽しい時間だった。衣装や装花はもちろんのこと、BGMを決めるのにも、プロフィールムービーの写真の選定にも、時間をかけてとことんこだわった。森の教会でのリゾートウエディングだから、当日ゲストに泊まってもらうホテルも慎重に選んだ。ふたりの休みが合う週末は、ほとんどが結婚式の準備だった。たまの小旅行は、会場やホテルの見学だった。席次表は知り合いのデザイナーに頼んで、オリジナルでつくった。ロゴマークも、ウェブサイトも作ってもらった。引き出物は参加者ひとりひとりに違うものを選んだ。

けれどそれは一生懸命であればあるほど、結婚式という、遠く

に見える一点の光に向かって、ただふたりで手をつないぎ、お互いを鼓舞しながら必死で走り抜けてきただけ、そんなふうに思うこともできる。途中で息を切らせて立ち止まることのないように、「楽しいね」という思い込みを麻薬のように注入し、ふたりの肉体にドーパミンだかアドレナリンだかをずっと分泌させ続けてきただけのような気もする。

振り向いてはいけない。ひたすら前を向いて走り続けなきゃならない。もしも振り向いたら、立ち止まったら、私たちの幸せはあつというまに疑いの暗雲に覆われ、絡みとられ、光を見失ってしまうかもしれない。

今朝、電車が一緒になった派遣のまみちゃんに、いよいよ今週末だね、と肩をたたかれた。出勤すると総務課の佐藤さんから、有給は金曜から一週間だよな？と念を押された。それを横で聞いていた辻村課長からは、そういや西山さん新婚旅行どこ行くの？と聞かれた。

私は、そうだよ、いよいよだよ、と答え、再来週の月曜に出勤します、と答え、セブ島です、と答えた。

「森で式して南の島でハネムーンかあ。リゾート満喫だねえ」
いつも一緒にお昼を食べる本田ちゃんは、食堂の味噌ラーメンをすすりながら羨ましそうに言った。私は手製のカロリー&糖質制限弁当をちよこちよこつまみながら、

「お土産ちゃんと買ってくるからさ」と、当日ゲストに向けるのと同じような、とびきりの笑顔を作って答えた。

「パイヤ石鹸」

「了解」

「舞衣ちゃん、元気戻ったみたいでよかった」

「ご心配おかけしました」

まみちゃんや本田ちゃんから、なんか最近沈んでない？と揃って同じことを言われたのは先週のことだ。

「式が近づいているからあれだ、マリッジブルーってやつだ」

「うんまあ、ちょっとそんな感じかも」

「幸せって手に入れると途端に恐ろしくなる、って、こないだ自己啓発本に書いてあった」

「まみちゃん、そういうの読んだ」

「舞衣ちゃんもそういう感じ？」

「うーん、どうだろう。そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないし、自分でもよくわかんないんだ」

私はそんなふうにてきとうに誤魔化して、それからは会社ではできるだけ楽しそうに仕事をするように努めた。

いまどきこんな女は珍しいかもしれないが、結婚は私のひとつの夢だった。

外国製の純白のドレスを身にまとい、美しい森の教会で式を挙げる。中学生のときに雑誌で見たワンシーンに、私はずっと憧れを抱いてきた。凜とした秋の森の空気。紅葉。恰幅のよいやさしい神父さん。オルガンの荘厳な音色。賛美歌。ライスシャワー。大切な家族と友人に見守られて、落ち葉を踏みしめながら、愛する人と未来を誓う。

私のその夢を、直哉はすべて叶えてくれる。

「いいよ、舞衣のやりたいこと、全部やろうよ」

私が彼のプロポーズを受け、おそろおそろの夢の結婚式の話を切り出すと、直哉はそう言っ胸を張った。

森の教会のことを伝えると、彼は十年以上前に私が見た雑誌の写真の記憶だけを頼りに、ネットでその教会を探し出し、「もしかしてこの教会じゃない？」と仕事中に画像を送ってくれた。それを見たときの私の感動は、言葉にできないほどだった。

「そこそこ！完璧にそこ！」

「今度の週末、見に行ってみる？」

「行く行く行く行く」

彼は長男だから、結婚式については両親の意向も当然あっただろうし、私のわがままを通すことで不快な思いをさせてしまった

部分もきつとあるだろうに、彼はちつともそんな素振りを見せなかった。彼の両親もまた、すべて認めてくれた。いい人たちがばかりだった。

ウェディングドレスは気に入ったものに出会うまで、ドレスシヨップを十軒以上まわった。ようやく自分の体型に合うイメージ通りのものを見つけたと思ったら、すでに予約が入っていて諦めなければいけなかった。ところが、私がそれを試着した翌日、急にキャンセルが出て、予約できることになった。そんな幸運もあった。

まだ終わってもいないのに、できすぎだ、と思う。もしも当日、突然すごい台風が来たり、山が噴火したりして結婚式が中止になっても、それはそれで構わないと思えるくらいに、私の心は結婚式についてはもう十分、満ち足りている。

でも、私が今、ひとり暮らしの部屋で風呂上がりにふくらはぎの美脚マッサージをしながら感じているのは、幸せでもあり、恐ろしさでもある。考えないようにしてきたこと。でも、いい加減、けりをつけなきゃいけないこと。

頭の中で思い浮かべているのは、直哉ではなく、大学時代から四年間付き合った私の前の彼氏、太郎ちゃんだ。

そういえば、私がはじめて自分の結婚願望を語った相手は、太郎ちゃんだった。そのときふたりはまだ十九と二十だった。

「三角屋根の森の教会でね、式を挙げるの」

「ふーん、いいんじゃないの」

「友達がみんな素敵な服を着ておしゃれしてきてね、ふたりの両側にこう道を作ってくれて」

「バージンロードね」

「そこを拍手と紙吹雪の中、ゆっくり歩いて」

「紙じゃなくてお米か花びらでしょ、それ」

「え、そうなの？」

「そうだよ。紙って、落ちたらそのままゴミじゃん。普通花びらをまくんじゃないの?」

「そっか。どう? そういうのよくない?」

「どうって言われてもなあ。俺らまだ大学生だし」

「別に、いますぐ太郎ちゃんと結婚したいってわけじゃないよ。ただの夢。そうならいいな、って夢」

太郎ちゃんは私より学年がひとつ上で、サークルの先輩だった。私が一年生の夏、飲み会のあと、酔った勢いで太郎ちゃんの部屋に泊まったのがきっかけで、そのままなんとなく付き合いはじめた。

その晩、なにもしないよ、と言って私を部屋に誘った太郎ちゃんは、私をベッドに押し倒し、強引にキスを迫ってきた。うわ、ちよと何すんの、と押し返すと、実は舞衣ちゃんのこと、はじめた見るときからかなり好きだった、と口説いてきた。蹴飛ばして帰ることもできたけれど、そうしなかったのは、私もずっと太郎先輩のことが気になっていたからだ。

で、一晩泊まって、またなんとなく一緒にご飯食べたついでに泊まりに行って、そうこうしているうちに他の友達にばれて、もしかしてふたりって付き合いってるよね、みたいな感じになって、本当に付き合いはじめた。

そんないかにも大学生的な、なし崩し的なはじまりだったから、気取らずに付き合い合っていたのがよかったのも知れない。私たちの愛情はとても穏やかで、ふたりで過ごす毎日、いつも小春日和のように気持ちのよい時間だった。

私たちが所属していたのはけっこう大きめの、バーベキューとかスノボとかを企画して外遊びをするゆるい遊びサークルで、人数が多いだけあって、その中では誰かと誰かが付き合いはじめたと思っただらどちらかが別の誰かに乗り換えて三角関係、そのたびに人間関係がギスギスして誰かがやめていく、みたいな事件が頻繁に起こっていた。でも私と太郎ちゃんの間にはスキャンダラス

な出来事は何も起こらず、授業とサークルとバイトとデートの繰り返しであつというまに三年半が経って、太郎ちゃんがひと足先に大学を卒業した。

太郎ちゃんの就職先は、東京にある東証二部の上場企業だった。第一希望ではなかったけれど、お給料がよかつたので太郎ちゃんはその会社を選んで上京。ふたりの関係は自動的に遠距離恋愛となつた。

私はといえば太郎ちゃんを追いかけて一刻も早く東京に行きたくて、大学最後の年の就活は、ひたすら都心の会社を受けまくつた。

「舞衣が受かったら、こつちで一緒に住むか？」

「そうしよ、そうしよ。絶対楽しいよ」

「また引越しないとだなあ。でもふたりなら広い部屋借りられるからいいか」

採用試験や面接で上京するとき、私は毎回太郎ちゃんの部屋に泊まつた。ワンルールの狭い部屋だった。私はそこに行くたびに、自分の歯ブラシやパジャマや箸やコップやいろんなものを新しく買つては置いてきた（私なりのささやかな浮気対策だ）。

私は東京での太郎ちゃんとのふたり暮らしを思い描きながら、その先には当然、結婚を夢見ていた。ふたりで頑張つて働いて、三百万円くらい貯金できたら結婚式ができるな、そのころに都合よくプロポーズしてくれないかな、なんて、採用通知が来る前からよく夢想到に耽つていた。

ところがある日突然、太郎ちゃんは死んでしまった。

交通事故。太郎ちゃんの運転する会社の営業車に、一時停止無視の軽トラが突っ込んだ。事故が起きた日の夕方に、私は太郎ちゃんのお母さんから電話をもらった。

え。ごめんなさい、よくわかんないんですけど。それで太郎ちゃんは今どうしてるんですか？

遠距離恋愛で離れていたせいか、私はまったく信じることがで

きなかった。お葬式はこっちに連れてきてやるから、舞衣ちゃん、会いに来て、と彼のお母さんから言われて、私は、こないだ東京で会ったばかりの太郎ちゃんにまたこっちで会えるんだと思つて嬉しくなつてしまった。ちつとも嬉しくなんかないと頭では理解しているのに、感情がそれに追いつかない。私は自分の身体と意識がずれていくのを感じた。どちらも宙ぶらりんで、ゆらゆら風に揺れているみたいだった。涙は出なかつたし、悲しいという気持ちにもならなかつた。ただ、時間の進む速度が変わつて、私という人間がこの場所にふわふわ浮いている、そんな感じだった。

直哉と出会つたのは、太郎ちゃんのお葬式の時だった。

その日は雨だった。葬儀に参列した会社の社員のひとり。それが直哉だった。東京からわざわざ私と太郎ちゃんが生まれ育つた町に、同僚を弔うためだけにやつてきた。黒いスーツの上下を着て、黒いネクタイをして、透明のビニール傘を差していた。会場では一番後ろの隅の方で、あと何人かいた会社の上司らしきひとたちと並んで座つていた。太郎ちゃんは仕事中に死んでしまったわけだから、そりゃ会社の人間が来るのは当然か、と私は冷静に思つていた。

直哉は表情のない顔をしていた。私と同じで、何もまだ受け入れていないけれどここに来るしかないから来た、そんな感じだった。だから私は彼のことをよく覚えていた。

太郎ちゃんのことを忘れられない私は、翌年、太郎ちゃんの面影を追いかけるようにして東京に出て働きはじめた。やめたほうがいいと親にも友達にも止められたけれど、私は最初に内定をくれた、清掃用品を扱う下町の小さな会社に就職した。

東京で働いていけば、太郎ちゃんに会えると思つた。恐ろしいほどたくさん数の人間がうごめいていて、その中には総理大臣がいれば映画俳優もいて、セレブも貧乏人もいる。有名な人も無名の人も。いい人も悪い人も。殺人犯だつて紛れ込んでいるだろ

うし、テロリストも隠れているかもしれない。だったら、幽霊だっているかもしれない。東京というのはきつとそういうところ。そう思い込みたかった。東京のどこかに、あの日、すんでのところで事故を免れた、パラレルの世界の太郎ちゃんが隠れているような気がしたのだ。

ある日、どうしても太郎ちゃんが勤めていた会社を見てみたくなって、オフィスの入っているビルの前まで地下鉄を乗り継いで行ったことがあった。高層ビルを地上から見上げ、正面玄関の往来をひたすらじつと見つめながらその場にたたずんでいたら、その中に、私に向かつて歩いてくる男の人がいた。

それが、太郎ちゃんのお葬式で見た、直哉だった。

「あの、すみません…」

「はい…」

「もしかして酒巻の、酒巻太郎の…」

「あ、はい、酒巻太郎の、…はい」

太郎ちゃんの名前を口にした瞬間、私は言葉に詰まって下を向いた。涙が出てきてしまったのだ。太郎ちゃんのお葬式で見たこの人とこの場所で顔を合わせるといことは、太郎ちゃんのお葬式が現実の出来事だったと認めるしかない。目の前が一瞬、真っ暗になった。その場にうずくまりそうなのをなんとかこらえ、私はすぐそばのベンチに腰を下ろした。

都会というのは便利なもので、オフィスビルが乱立しているところは、だいたい近くにカフェがある。直哉は私をすぐそばのオープンカフェの路面に出ている席に座らせて、店の中に入ると、すぐにあたたかい紅茶のカップをふたつ運んできてくれた。

「高木直哉っていいいます」

彼はポケットから名刺入れを取り出して、名刺を一枚くれた。それは、私がお守りのように財布にずっと入れたままにしている太郎ちゃんの名刺と、まったく同じ紙と書式でできていた。

直哉にとって太郎ちゃんは会社でただひとりの同期入社社員

であり、友達だったそうだ。私のことは太郎ちゃんから何度も聞かされていたという。実はあなたのこと、ずっと心配していました、と彼は言った。ご心配おかけしてすみません、と私が頭を下げると、あ、いやいや、と彼は困ったふうに言っただけで自分の紅茶に口をつけた。

「舞衣さん、でしたっけ」

「はい。すみません、私、名刺持ってきてなくて…」

「確かコーヒー、苦手ですよ」

「え、そんなことまで知ってるんですか？」

「太郎、コーヒー好きですからね。せつかくいい豆買っても、彼女と一緒に飲んでくれないからなーってばやいてました」

それを聞いて、私はまた少し泣いてしまった。

太郎ちゃんからはいつもコーヒーの匂いがしていたのを思い出したのだ。苦いから飲むのは好きじゃなかったけれど、あのコーヒー豆の香ばしい匂いは好きだった。太郎ちゃんの匂い。手触り。かたち。私の頭の中は太郎ちゃんで溢れた。

「ダメですね、私」

「いや、俺もダメです」

涙を拭いてから見上げると、直哉の目も潤んでいた。

「俺ら、春からずっと一緒に仕事してたんです」

「一緒に」

「はい、一緒に。ずっと」

「私も、大学一年のときからずっと一緒にいました」

「ずっと」

「はい。ずっと」

その日、私と直哉は連絡先を交換した。

それからときどき、ふたりでご飯を食べに行くようになった。

太郎ちゃんの思い出を交換するためだ。

私は東京で暮らした太郎ちゃんのことを知りたかった。直哉は、わずか数ヶ月しか一緒にいられなかった友人の、昔の話を聞

きたがった。

私たちはお互いの記憶と印象によって、太郎ちゃんというひとりの人間の姿をかたちづくっていった。まるで太郎ちゃんを生き返らせるみたいだ。それは、私のさびしい都会暮らしのなかで、唯一、心が安らぐ時間だった。いつのまにか私は直哉に心を開いていた。なんでも話せるようになっていた。

ふたりが付き合いはじめるのは時間の問題だった。

太郎ちゃんを想う気持ちは、私の心の最高の地点にあつたまま、そこから動かない。私が死ぬまで、動くことはないだろう。

太郎ちゃんの記憶を振り払うことが、私にとっての結婚だろうか。幸せだろうか。

ふくらはぎのマッサージを終えてから、顔に貼りつけたパックをはがして、洗面所で歯磨きをする。なんだろう、このやるせない気持ち。何度も何度も何度も自問して、そのたびに答えを出すことを先送りにしてきた。

ベッドにもぐりこんで布団をかぶって電気を消しても、うまく寝付けない。日曜日までに答えを出さないといけないような気がして、焦ってしまう。こんな気持ちのまま式を迎えるなんて、なにより直哉に申し訳ない。

もうここにいない人のことをいくら考えたって、らちがあかないのはわかってる。でも、ここにいない人だから、いつまでも考えてしまう。いつまでも愛してしまう。

私はふと、まだ削除できないでいる太郎ちゃんのメールアドレスにメッセージを送りたくなって枕元のスマホに手を伸ばした。

太郎ちゃんへ。私、結婚するよ。直哉と結婚するよ。

私は幸せです。太郎ちゃんのこと大好きだけど、幸せです。ときどき、考えます。太郎ちゃんと直哉とどっちが好きなんだろうって。直哉の方が好き、って思う日があれば、やっぱり太郎ちゃん

ん、って思う日もあります。でも、いまは直哉の方が好き、って思うようにしているよ。直哉に出会えてよかった。直哉が私のことを好きになってくれてよかった、って。なんだか不思議。幸せって、こんなにかなししい気持ちなのかな。ごめん、って太郎ちゃんに謝ったほうがいいのか。だって、太郎ちゃんが死んだから、私は直哉に出会えたんだよ。直哉に出会うには、太郎ちゃんが死んでくれなきゃいけないかったんだよ。

メールを送ったって、どうせもう送信先のアドレスは存在しないのだから、宛先不明でどこにも届かない。

ところが、送信ボタンを押しても、戻ってくるはずのエラーメッセージがいつこうに戻ってこなかった。おかしいな、と思ってメッセージのアプリを閉じたり起動したりしていたら、一通のメッセージが届いた。

でもそれは、エラーメッセージなんかじゃなかった。

〈舞衣へ。結婚おめでとう。マリッジブルーの調子はどうですか。そろそろ、終わりにしたらいいと思うよ。〉

誰かと思った。まみちゃん？ 本田ちゃん？ それとも別の友達？ でも彼女たちはこんな言葉づかいはしない。

発信者を示すFromの文字の横には、酒巻太郎の名前があった。私はそのアドレスを何度も確かめた。確かに、太郎ちゃんのアドレスだった。

〈俺が死ななきゃ直哉に会えなかったって言うけど、実際はそんなことないと思うよ。だって東京で一緒に暮らしはじめたら、俺、会社の友達って言って直哉のこと紹介しただろうし。知り合いうのなんて時間の問題だったよ。まあ、こんな結末にはならなかったと思うけどね（笑）。でもその気持ちは、舞衣だけのものじ

やないよ。直哉もいま、あいつの部屋で同じこと思ってる。俺に悪いって。これで本当にいいのかって。今夜だけじゃない、ずっとずっと、あいつは思ってる。あいつ、何度も舞衣と別れようと決めたんだ。でも別れられないでやんの。俺はさ、本音を言えば、うれしいよ。ふたりが一緒にいてくれることで、俺もふたりと一緒にいられるから。く

く死んじゃってから思うんだ。人がこの世からいなくなるって、実は未来をつなげる大事なことなんじゃないかって。誰もそんなこと教えてくれないけれど、誰かがこの世を去るから、誰かと誰かがこの世で出会うんだ。きっと、みんな意味があるんだよ。く

く結婚式、楽しみにしてるよ。俺は森の枯れ葉の一枚になって、ばれないようにこっそり見てるから。よかったね、って、風が吹いたふりをして、かさかさ、拍手してるみたいな音を立てるから。おめでとう。でも人生はこれからだよ。生きてくれ。ふたりで楽しく、俺の分も生きてくれ。く

最後まで読み終わると、突然スマホの電源が落ちた。

慌てて再起動してまたメールアプリを開く。でも、太郎ちゃんのメールはどこにもなかった。今まで読んでいたメールは、いつたいたんだっただろう。太郎ちゃんからメールが届くなんて、そんなことあるわけがないのに。

私の都合のいい妄想かもしれない。太郎ちゃんにあんなふうに言っただけで、あんな言葉をかけて楽しんで欲しくて、寝入るばなに夢を見ていたのかもしれない。そう思うことでしか、説明がつかない。

そのとき手のなかでブルツとスマホが震え、私は驚いてベッドの上にスマホを落としてしまった。今度は直哉からのLINEだ

った。

開いてみると、〈夜遅くにごめん。いまさ、不思議なメールが届いたんだけど…〉と書いてある。

太郎ちゃん、直哉にもメールを送ってくれたんだね。

私は文字を打つのもどかしく、直哉に直接電話をかけた。

直哉の声が聞きたい。久しぶりにふたりで、ずっと封印していた、太郎ちゃんの思い出の話をした。

コール音を聞きながら、私は思う。

これからも私たちは太郎ちゃんの思い出を語り合って生きていこう。太郎ちゃんを愛し続けて生きていこう。正直に、ふたりで生きよう。

「あ、もしもし、私。そのメールってさ…」



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。

※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。